



体育大会・感動するには訳がある

校長 小木曾敏樹

感動の体育大会は、5月30日に、偶然に起こったわけではない。チームリーダーたちの演出はあつたにせよ、なくても感動はあつたはずだ。一人一人が、係に、演技に、競技に、精一杯頑張る姿があつたからだ。そして、この体育大会は、実は3週間の取り組みではなく、足掛け2か月に及ぶ取り組みだったからだ。

当日のチームパフォーマンス。一つ一つの競技。どれをとっても真剣さが伝わってきた。練習を重ね、当日を迎えたことがよくわかった。さらに、それを支えた各係の動きはどうだっただろう。競技と競技の間に、グラウンドをダッシュしている器具係に気付いただろうか。ある保護者の方がつぶやいていた。「なんでだろう。今年は何にかすごさわやかだね。」と。競技はもちろんのこと、目立たなかったかもしれないが、各係も精一杯動いていたからにちがいない。

3年生学年種目『道』(多人多脚)。成功して涙、失敗して涙の競技だった。なかなかゴールにたどり着けないチームを他のチームが応援する光景は他校にもあるだろう。しかし、あの日なかなかゴールにたどり着けないチームを心配する生徒たちの表情を見ましたか。手を合わせ祈るような表情をしている生徒がいたことを私は見逃がさなかった。自分に置き換えた時、ゴールにたどり着けない仲間の気持ちが痛いほどわかってしまったのだと思う。この競技にかける想いがあるからこそ、ライバルチームであっても辛かったのだ。

大縄跳びも各学年で、各学級でドラマがあつた。結果が1位でも2位でも3位でもないクラスが、とても喜び合っていた。練習でなかなか記録が伸びずに、一生懸命練習していたクラスだ。順位ではない。自分達がどれほど成長したかが大切で、自分達の努力が数字に表れることが大切だったのだ。

5分間で200回を超すクラスがいくつも出た。昨年までなら、200を超せばほぼ優勝だったのに、今年は優勝どころか2位3位も危ない。ゆっくり縄を回し確実に跳んでいくクラス。高速で縄を回し一挙に回数を稼ぐクラス。これまでの取り組みの中で、自分達のクラスに合った跳び方を見付けだしたのだ。4月半ばから始まった朝、昼の自主練習で高まったのは、技術だけではなく、心を合わせるものが大切だという意識。

競技前、テントの裏で円陣を組み、掛け声をかける各クラス。他学年の競技を応援する姿。そして、相手チームを応援する姿。



感動の解団式、学級での話、そして、500人が輪になっての大合唱。予定終了時刻を大幅に過ぎていたため、教員が出した指示は、「30分を目標にみんなで片付けるぞ。」テントの数だけでもかなり有り、椅子や机、器具に砂袋、かなり難しい注文だと思った。しかし、15分後にはほぼ撤去され、25分後にはほとんど完了していた。誰も疲れた表情で働いていない。むしろ生き生きとしていた。

体育大会の1週間前、各チームリーダーを校長室に呼び質問した。「閉会式の後の自分は、どんな様子が想像できるか？」自分自身の目指す姿を明確にしてもらいたかったからだ。するとこう返ってきた。「泣いています。」リーダーが一生懸命取り組み泣けるのは当たり前。リーダーならば、その感動をチームで共有しなくてははいけない。これが校長からリーダーに与えたミッション。そして、リーダーたちが考えた方途は、500人が輪になっての大合唱だった。

感動は約束されていたのです。感動するだけの想いがあり、努力があつた。生徒たちを心から誉めたい。

